漢詩神奈川

第　11　号

神奈川県漢詩連盟

横浜市栄区笠間
5-3-2-103

TEL－FAX
045-895-2662

発行人　岡崎　満義
編集人　桜庭　慎吾

県漢連理事会開催さる

人事・組織を新たに

神奈川県漢詩連盟の理事会が平成二十三年十月二十四日に開催された。

岡崎満義新会長の挨拶に続き、桜庭新事務局長の司会によって、各理事・運営委員から活動報告がなされ質疑の後、来年度の方針が方向付けられた。

審議事項として新組織・人事については副会長を新たに設けることと、中山清前会長(当時)の顧問就任が承認された。

なお、会長・事務長の交代と委員の設置については既に五月の県連総会において承認されている。

新陣容によって今後の県連の活動がさらに活発に展開され、年々増えてきた会員の期待に添うことが望まれる。

会長　岡崎満義
副会長　田原健一・水城まゆみ
事務局長　桜庭慎吾
理事　石川省吾・岡田泰男・玉井幸久・古田光子・礒野衛孝・窪寺啓・中山清・岡崎満義・田原健一・水城まゆみ・桜庭慎吾・城田六郎・三上光敏・住田笛雄・川上修己・高津有二・中島龍一・三村公二・室橋幸子・吉岡昭夫
顧問
執行理事
監事
運営委員

神漢連の新陣容

『肩車社会』を逆手にとって

平成二十四年の活動をイメージする

神漢連　会長　岡崎満義

漢詩(細かく言えば漢詩実作者)は絶滅危惧種だ、と思っています。全日本漢詩連盟が設立されて九年、その間の全国的な漢詩大会への応募者数をみると、大体五百～千二百人、つまり日本の人口の０・００１％ということになります。しかも七十台が最も多く、六十代以上が多分、七十～八十％以上を占める筈です。スーパー少子高齢化社会の典型でしょう。

世界に冠たる医療皆保険、年金制度がゆらぎ始めました。とくに年金は今、現役世代が三人で一人の高齢者を支えているのが、三十年後は一人で一人を支える「肩車社会」になる、と心配されています。

漢詩界を歴史的に見ると、西暦七百五十一年に日本初の漢詩集「懐風藻」が生まれ(「万葉集」より八年早い)、その八十年後には早くも訓読法が開発され、以後千年にわたって日本人は漢詩を自家薬籠中のものとしてきました。それは日本文化の根底を作り上げました。

幕末維新に至るまで「和魂漢才」が、日本知識人のライフスタイルとなりました。それが明治の文明開化、富国強兵の時代が始まり、「和魂洋才」に変わります。大正五年に漢詩人でもあった夏目漱石が亡くなり、翌六年に朝日新聞紙面から漢詩欄が消えました。

そして昭和二十年、敗戦を迎えて「和魂米才」の時代が始まりました。民主主義になりましたが、漢詩はますます斜陽となります。明治から約八十年、そこからアメリカナイズされた生活を始めて現在まで約七十年、それはフクシマ原発大事故でピリオドを打った、と言ってもいいのではないでしょうか。いよいよ、正真正銘のお手本の無い時代を迎えました。

こう見てくると、八方塞がりに見えますが、神奈川県漢詩連盟はこれを逆手にとって新しい道を切り拓けるのではないかと思います。逆肩車社会、年金・経済的に高齢者が肩車されるなら、文化的・地域的に高齢者が一歳でも若い人を肩車して生きる。子供、孫、隣人、友人、知人、誰でもいいから各人が一人を漢詩の世界にひき入れる、漢詩の話ができる、コミュニケーションのツールとしての漢詩、それを通して作ってみようという人をみつける、老々介護ならぬ老々会話、老若会話を一人の親しい人とたえず出来る状況を作るのが逆「肩車社会」だと思います。肩車にはスキンシップもあります。それを実現するためのハードルは、実はそんなに高くないのではないか、と思っています。この肩車システムが回転していけば、たとえ漢詩が絶滅危惧種であり続けても、永久に絶滅することは無いはずです。

神漢連の集まりに出かけると面白い、楽しい、温かいよ、という風でありたい。そのために吟行会、新人入門講座、研修会、漢詩サークル交流会という場をこれまで以上に充実させたいものです。

まわりを見渡すと、殆どの人が現役時代にすばらしい仕事をしてきた人、一芸の持ち主で、その後、漢詩の世界に入ってきたわけで、いわば一身にして二世を生きつつある、という意欲的な人たちです。現役時代を背景にして「漢詩と私」というテーマで会員一人ひとりに話してもらえると、神漢連の活動にやわらかいふくらみが出てくるような気がします。

顧問の窪寺啓先生は「漢詩を楽しむ、漢詩で遊ぶ」をモットーに、と言われるのですが、「漢詩と私」をみんなが話すことは、漢詩を楽しむことに繋がるのではないでしょうか。

十一月から詩吟の会「岳精流日本吟院」(宗家横山精真氏)の本部で、その会員の方々に、神漢連の役員が出かけて漢詩作りの基礎を講義するという活動が始まりました。〝出前講座〟です。漢詩キャラバン隊です。これによって、うれしい横の絆が出来るような感じです。漢詩の肩車社会とはフェイス・トゥ・フェイス、ぬくもりのある社会ということです。スポーツの世界によく似ています。スポーツはマン・トゥ・マンの指導が基本です。漢詩もこれが基本です。

「私」は一人年老いて死んでゆくのではない。肩車をすることで「私」は次(世代)へ伝わっていく。漢詩という伝統のあるツールを使うことで、「私」は生き延びて行く。神奈川県漢詩連盟はそんなことが実感できる場でありたいと願っています。

平成二十四年の活動にむけて

事務局長　桜庭慎吾

平成二十四年の幕開けに当たり、県連の活動に対し一言抱負を述べさせて戴きます。

故中山前会長と田原前事務局長のもとで布かれた、県連の五ヵ年の諸活動の基盤を更に強化してゆくべく、岡崎新会長を支えてまいります。そして新発足の運営委員制度の機能が十分に発揮されるよう、チームワークの強化に努めて参りたいと思います。

そして会員の皆様にとって漢詩の詩作や鑑賞が生涯の趣味として定着してゆくように、また漢詩愛好の仲間の交流が盛んになるように、県連としては諸活動を展開して参ります。

仲間つくりの〝きっかけ〟として、県連では毎年四月より六月までの三ヶ月間、六回の初心者入門講座を運営しており、本年は四月五日(木)より月2回のペースで講座がスタートします※。会場は県連のホームグラウンドである神奈川近代文学館です。

会員の皆様には、漢詩に関心をお寄せの方を是非とも紹介ください。特に定年後の趣味を始めようという方には好適だと思います。

その他の活動として、春と秋の研修会は〝忌憚のない互評〟の展開が特徴です。楽しみにご参加下さい。

昨年末好評であった窪寺啓先生の「漢詩作法上達のコツ」をふまえて第2回講演会の企画、そして県連ホームページ開設の検討などが進行中であります。

以上本年度の活動の概要と抱負を申し上げます。

※詳しくは本号最終頁の「二十四年度前半のスケジュール」を御覧下さい。

訃　報

中山　清　氏　逝去

神奈川県漢詩連盟の会長として連盟を創立時から五年間　運営　指導して活躍された　中山清氏は十二指腸癌のため十二月四日に悠久の眠りにつかれました八十四才でした

ここに謹んで哀悼の意を表し　心からご冥福をお祈り申し上げます

平成二十三年十二月四日早朝中山葦舟先生溘焉而逝悵然賦此以奠靈位

病入膏肓經半年
祈求再起遂無痊
作詩錬薬功逾盛
今日相州暗澹天

窪寺　啓

中山清氏を追悼して

文人科学者のみごとな生涯

岡崎満義

私が愛読した「愛酒楽酔」の著者、坂口謹一郎博士が、東京大学時代の恩師と聞いて、中山清さんの生き方が少し分かるような気がした。

坂口博士が醸造学の大家で日本酒やワインの専門家で、かつ優雅な短歌を詠む歌人でもあったように、中山さんもアミノ酸の研究と工業化手法の開発で日本学士院賞を受賞、その後、協和発酵をリタイアして、漢詩に打ち込み、「作ってわかる漢詩の味」という名著もあらわす文人科学者、まさに一身にして二世を生きた人である。

中山さんの漢詩体験は戦時中の幼年学校時代に始まったようだが、勤務した協和発酵で歌人の吉野秀雄さんを招いて、短歌を指導してもらった、と聞いた。そんな詩心が退職後に花開いたのは、朝日カルチャーセンター横浜の漢詩実作教室。石川梅次郎、窪寺啓　両先生の下での漢詩修行、晩年には朝日カルチャー湘南で漢詩入門講座を開講された。「作ってわかる漢詩の味」の末尾に載せた「葦舟棹聲集」に収められた多くの漢詩を読むと、バランスのいい端正な、まさに漢詩の王道をいく作品で、私のような時事漢詩もどき、B級グルメ的な詩を作っている者から見ると、溜息の出るものばかりだ。

中山さんを有難く思う第一は、神奈川県漢詩連盟創立以来五年間、その基礎固めをしっかりしていただいたことだ。とくに、春の初級者入門講座6回を、懇切丁寧にかつ厳しくやっていただき、そこから金星会、三水会、好文会、詩遊会、五友会と、いわば連盟の中核となる漢詩サークルが生まれた。連盟の運営委員制度が新しくでき、活発に動き出した今、あらためて中山―田原コンビの力の大なることを思うのである。全日本漢詩連盟会長の石川忠久先生から「神奈川の新方式」とおほめの言葉をいただいたのも、中山さんの力によるところが大きかった。

十二月五日、田原さんからの電話で、闘病中の中山さんが四日朝、ついに亡くなられたと聞いて、茫然とした。五年目の初級講座を終えた翌日、市の検診から精密検査、ガン手術でそのまま入院、一時帰宅されたが再入院でふたたび元気な姿にはお目にかかれなかった。

憶中山清先生

博學多才前半生
近年金港盛詩名
春風駘蕩平生態
耳底猶留温雅聲

絵島で吟行会開催！

第六回吟行会は九月十三日、総勢四十二名、石川岳堂先生にもご参加頂き、江の島で開催された。江の島〈渡る大橋の袂で記念撮影の後、参加者一人ひとりに当日の柏梁体の韻字（尤）が手渡された。

散策コースは、児玉神社→江の島神社→江の島展望台→稚児ヶ淵であったが、児玉神社では後藤新平、稚児ヶ淵では服部南郭の七言絶句の詩碑を見学した。

懇親会では、石川先生の即興の二詩が披露され、恒例により住田監事が朗詠した。ここでは、一詩のみを紹介する。

絵島古来騒客郷
幾多詩藻衒文場
就中菅老有佳句
富岳全身天一方

続いて、当日の柏梁体の優秀作が石川先生から発表されたが、今回は、着眼点がユニークで発想豊かな名句も幾つか詠われており、吟行会も回を重ねるごとに、会員の実力が向上していることにお褒めの言葉を頂いた。

（詳細は、「絵島吟行会柏梁体」の項参照）

その後、新人研修の一期生から四期生までの夫々の漢詩サークルの代表から活動状況の報告があり、詩吟、民謡等の余興もあって、会員相互の親睦は一段と深まり、和気藹々のうちにお開きとなった。

（高津記）

絵島吟行会　柏梁体

城田六郎編

九月十三日秋晴れの一日、四十二名の参加を得て吟行会が催された。今回の尤韻は険韻ではないが、幾つか使い難い文字が含まれており、それに当った人はご苦労されたことと思います。また中には奇抜な発想の句も幾つか詠い込まれているので、柏梁体の風趣が一段と向上したと思われます。

「尤韻」

欲遊絵島發蘆洲　石井彦徳
長橋投影度絵州　中野国武
跨海弁天橋路修　石川岳堂
絶佳看景歩如牛　唐戸輝哉
緑山絵島共朋遊　坂本健作
神神絵島老翁周　川上修己
蹇翁厭磴今好丘　岡田泰男
登路社前緑樹稠　吉岡昭夫
賽人社頭漱清溝　佐藤昭二
涼飈汀曲古祠頭　中西エツヨ
初訪神社知緑由　小松日出夫
香風伴友復何求　室橋幸子
遠来緑島暑気収　酒井謙太郎
天下一名勝毀憂　檜山大作
爾霊山石在知不　三浦哲郎
樹陰尋碑夏日幽　古田光子
古碑久闊聴吟嘔　磯野衛孝
名勝幾多凝吟眸　中島龍一
眺望銀波暫不休　松山正明
生響水琴霊気投　森川誠一郎
緑濃参道伴鳴鳩　乗竹恒男
潮風吹上鳶悠悠　鈴木栄次
爽風高塔碧天抽　小館裕彦
碧天如水深客愁　高津有二
海風清涼雲油油　瀧川智志
万頃相灘一碧秋　城田六郎
高楼向月秋色留　小山田豊実
天青波穏白船浮　生駒祐子
遥望蒼海漾軽舟　水城まゆみ
遥対富嶽展望楼　宇津井寛
迢逓火雲富嶽捜　岡崎満義
雲蔽霊峰不用尤　三村公二
残炎残蝉西風優　大原真理子
何處蛩聲月一鉤　三上光敏
天高金風作酔侯　松本征儀
吟行有酒有珍羞　飯沼一之
拭汗甘水酒似仇　住田笛雄
天高絵島騒客謳　桜庭慎吾
肥猫曝背漁家陬　岡崎勝郎
栄螺当耳聴潮流　田原健一
堂塔仏神如誘鷗　佐々木正人
弁天妙音誰得偸　玉井幸久

懇親会の席上、石川忠久先生の講評があり、十数句の優秀作、又は面白い句の発表があった。

その中から両名の感想を戴きました。

宇津井寛氏

私の韻字は「樓」、とっさに有名な岩本樓を思い浮かべ些かほっとする。

行程表に従って児玉神社、辺津宮、中津宮を参拝し、展望灯台に登る。海抜百一米、視界三百六十度の眺望はまさに絶景。残念ながら富士山は雲の中。更に奥津宮を経て三百六十段ほど下ると稚児ヶ淵。夕景が素敵なところとか。心を残して帰途。

半日の行程中ずっと岩本樓を考え続けたが柏梁体に纏めきれず。苦し紛れに提出した句が、思いがけなく石川先生の選に入る。ことのほか思い出深い吟行になった。

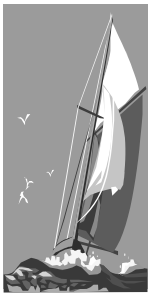
生駒祐子氏

皆さんと記念撮影の後、韻字が各人に配られました。緊張の一瞬です。私のは運よく「浮」でした。海だから、船を浮かべようと直ぐに思い、下三字は白舟浮か白雲浮のどちらかにしようと決めました。

天気のよい日でしたので、この空の青を詠みこんで白と青の色鮮やかな句にしようと思いました。展望台に登ってみると、波の穏やかな海が果てしなく広がっていました。すると白船浮の方がいいと思いました。

大きな海と小さな船を対比させ海の雄大さを感じてもらえるかなと思って。王籍の「鳥鳴いて山更に幽なり」のように。

選んで頂けて本当に嬉しかったです。これからも一層の努力をしたいと思います。



五友会が発足

幹事　飯島敏雄・土屋昇三

平成二十三年度神奈川漢詩連盟の第五回初心者入門講座の修了生のうちの十二名の有志で漢詩作成の勉強を継続する「五友会」が発足しました。会の発足に当って桜庭事務局長から飯島と土屋が世話人を依頼され、僭越ながら五友会の発会式で任命されました。合評の方を飯島が、その後の懇親会と神奈川漢詩連盟の運営委員を土屋が引き受けることになりました。

会の名称、五友会の「五友」は次の三つの意味を持っています。一つは五期生の友の会、二つめは「二師三兄五友五弟」という中国の諺の中の五友を意味しています。「友」とは志を同じくする、あるいは苦楽をともに分かち合うことのできる友人です。その友人が五人以上いなければならないということです。

三つめは漢和辞典にもある「五友」で、明の儒者、薛瑄(せっせん)が「友竹軒記」の中で、草木のうちで特に高潔なものとして愛でられている竹・梅・蘭・菊・蓮の五種を五友と呼び、これらは漢詩にもよく出てきます。欲張りですが「五友会」は以上の三つの意味を持った会名です。

会は二ケ月毎の第一木曜日に午後二時から四時まで二時間開催します。十二月一日の発足式の後の時間では、会員の中国語が堪能な清水純子さんが持ってきてくださったCDの中にある有名な李白の「早発白帝城」と杜甫の「春望」二詩の和文での読下し、中国語での読下し、および中国語での吟詠を聴きました。皆、韻がどう聞こえるか耳をそばだてていました。自分の作った漢詩をいつか中国語で聞いてみたいと皆思ったでしょう。それが終わった後は場所を変えて歓談し、懇親を深めました。二月からいよいよ合評が始まります。会員一同、田原健一先生と高津有二先生の指導を賜り、先輩諸兄に一歩でも近づけるよう精進していきたいと心しています。

秋の研修会を終えて

城田六郎

秋の研修会は五十三名の参加を得て、三グループに分けて実施いたしました。今回から研修会の実を挙げるために、老婆心ながら「詩を作る際の規則」九条を事前にお知らせして、これを遵守するようお願いいたしました。

しかし残念ながら、なお幾つかの規則違反が見られました。その筆頭は平仄の間違いが十件ありました。あやふやな記憶に頼らずに必ず辞書で確認していただきたい。次に多いのが、意味の重なる語の使用です。例えば「懐」と「思」、「海」と「瀛」などが該当します。意味の重なる詩語は詩の印象を散漫にしてしまいます。そのほか「同字重出」「孤平」「和語」なども散見されました。

日常の詩作にはこれらの事に留意していきたいものです。今年の研修会は、六月十二日(火)、二十六日(火)を予定しております。奮ってご参加下さい。

各グループの得票一位(同率一位が二組)の句は次の通りです。

静　夜　　大谷明史

夜深擱筆立庭前　時有清風吹樹邊
吾竟無才空老耄　仰瞻銀漢暫忘眠

十五点という投票は光栄です。

承句の書き下しは、城田先生のご教示により修正しました。転句の三、四字目は当初「無為」を考えましたが、この語には寧ろ肯定的な含意があり此処では些か不適かと判じ「無才」としました。この転句は「安易な誇張」との批評を戴きました。席上ほかにも自ら気付かなかった点を幾つかご教示戴き、有意義な研修の場となりました。

讀　史　記　　中島龍一

老躯燈下対陳編　堯舜如生甦眼前
坐覚讀書延命薬　躍然心遶四千年

思いがけない得票で光栄です。承句の下三字は当初「太古伝」でしたが、指摘があり改めました。結句は「心巡躍躍四千年」でしたが古田先生から「巡」は四千年の直ぐ前に置いたほうがとの意見があり、平仄を合わせるため「遶」を使い右のように改めましたがどうでしょう。

望郷秋思　　宇津井寛

故山楓錦競秋妍　満目金波是美田
萬里離郷七旬過　客心帰去又何年

思いがけず第一順位に選ばれ、正直に嬉しいけれど些か違和感もあります。

私は漢詩語に馴染み少なく、貧弱な語彙の中から易しい言葉を選んで詩を纏めているので、得点は詩の優劣とは別に解り易いことに対する評価かと思います。評価の仕方を変えれば順位は違ったかも知れません。評価基準を再検討する必要はないでしょうか。

自舊友見贈甘果　　吉岡昭夫

豈期欣矚尺書名　久闊幾秋壊想更
開篋芳香満胸裏　嚼来滲透故人情

選評の席で何人かの方がお気づきの通り、この詩は「神奈川清韻」に載ったさる先達の方の詩に啓発されて出来ました。何よりも先ず「先達の方」にお礼を申し上げます。

しかし詠んでいる内容は架空ではなく贈り主が実際に居ますので彼にも礼をいいました。漢詩には門外漢の人なので、これも石川先生に倣い、七五調の意訳を添えました。

思いがけない贈り主／お別れしてから幾秋ぞ／箱を開けば香り立ち／　味わうほどに思い満つ

座禅有感　　尤華　上田尤子

古寺寒梅自放香　揺揺燈火坐僧堂
時聞禪杖叩肩響　胸裏一條尊佛光

この度は皆様の貴重な一票のお蔭で大きな喜びを実感させて戴きました。実体験をもとに作詩したもので雑念を払うという意味では座禅も書も漢詩も共通点があり、偶然とはいえ素直な気持ちになれたと思います。

社中を持って十九年色々な古典を学び、その源を求めて中国各地を巡り感動を受けました。いつかこの深い想いを余韻のある書線や詩に表現したいと思います。漢詩つくりを続けていて本当に良かった、感謝の気持ちでいっぱいです。

県連会員の受賞　多し

県連会員の応募作品が各所で受賞しており神奈川県の漢詩創作の水準は一段と向上しているとの感を思わせるものがあり、喜ばしい限りです。

☆佐賀県多久市の「全国ふるさと漢詩コンテスト」において、古田光子氏が「最優秀賞」を受賞し、記念の石碑に受賞の詩を刻まれるという栄誉を射止められました。

☆全日本漢詩大会栃木大会において、石川省吾氏が栄えある特別賞を受賞、さらに入選作に小山典子氏、久川憲四郎氏が入りました。「扶桑風韻特別第九号」

☆新潟県の諸橋徹次記念漢詩大会においては、優秀賞に古田光子氏、奨励賞に宇津井寛氏（特別賞も併せて受賞）、中島龍一氏、永津憲明氏、岡田泰男氏、　秀作賞に水城まゆみ氏が受賞されました。「奥風詩筒第三号」

皆さんおめでとうございます。　受賞者に喜びの言葉を頂きました。

全国ふるさと漢詩コンテスト最優秀賞

湯島聖堂秋　　水荘　古田光子

楷樹森森氣爽然　楷樹森々として気爽然
杏壇講話徹秋天　杏壇の講話秋天に徹る
無風黄葉蕭蕭下　風無くして黄葉蕭々として下り
埋盡温容聖像邊　埋め尽くす温容の聖像の辺

十五年以上、公開講座を受けに通っている湯島聖堂、そこには孔子のふるさと曲阜ゆかりの大きな楷の木があります。秋になって黄葉すると、無数の細かい葉がはらはらと舞い落ちてあたり一面を黄色く埋めます。聖堂の四季のうちで私の最も好きなすばらしい状景、これを詠んだものです。

まず後半の転句と結句ができました。転句の蕭蕭下は杜甫の[登高」中の語句で「登高」を読む時はいつも、この聖堂の景と重ね合わせていましたので使ってみました。

それから聖堂のシンボル孔子像、私の心の中の孔子は、〝温かい人〟という感じですので、〝温〟という字を使ってみました。

あるがままの景を詠っただけですが、多久市の漢詩大会で最優秀賞をいただき、多久聖廟の近くにこの詩の碑を建てていただいたことは、この上ない喜び、作詩を続けてきてよかったと感じております。

全日本漢詩大会栃木大会

[特別賞　わたらせテレビ賞]

尋蘆山遇雨　　芳雲　石川省吾

一條花徑楽天臥　一条の花径　楽天臥し
千丈飛流太白吟　千丈の飛流　太白吟ず
脳裏詩章空口誦　脳裏の詩章　空しく口誦
凝眸秘境雨雲深　眸を凝らす秘境　雨雲深し

十年前、日中友好自詠詩書交流会が南昌市で開かれたのに同志とともに参加し、景徳鎮～九江～蘆山と詩跡を探訪した。陶淵明や李太白、白楽天など著名詩人の足跡の一端を経回って特に印象深い旅であった。

今回の漢詩大会の詩題が「山」であったことから蘆山を思い浮かべた。実際の旅でも山歩きの途中で天候が急変して後半に雨となったが、行ってきました、見てきましたでは芸が無いと思い、折角行ったのに雨に遇って秘境を探ることができなかった事の設定を試みた。幸いに起承を白楽天、李太白をからめて対句にし得たのが、目に留めて頂けた点と思われるが、転句が未熟、あるいは結句が弱いと種々批判も賜り、まだまだ勉強不足を痛感している。

[入選]

悼海嘯掠児童　　小山典子

児輩今春去下泉　児輩今春　下泉へ去る
別離儵忽嘆綿綿　別離は儵忽　嘆きは綿々たり
路傍軽燕争帰舎　路傍の軽燕　争いて舎に帰るも
魂魄安之端午天　魂魄安くにか之く端午の天

被災地の空を泳ぐ鯉のぼり。このテレビの映像がモチーフとなりました。三月十一日、冷たい海に掠われてしまった多くの子供たちの魂が、肉親や故郷を求めて、あの鯉のぼりを目印に戻って来ているかもしれない。彼らの声を聞くことが出来なくなってしまった今、せめてその思いを手繰り寄せ、なんとか言葉に表現できないものか。そうして始まった作詩は、推敲を重ねれば重ねるほど感情があふれて収拾がつかず困りました。できるだけ冷静な視座を心がけたつ

もりですが、鎮魂の詩として読んでいただけたら幸いです。

[入選]

電視看東日本巨大地震　久川憲四郎

激震来襲三陸阿　激震　襲来す三陸の阿
萬家呑盡百千波　万家　呑み尽くす百千の波
幸哉頽屋足容體　幸いなる哉頽屋体を入るるに足る
旬日飢寒孫與婆　旬日　飢寒　孫と婆と

・

東日本巨大地震により、日本中が心を痛めていた中、石巻市の崩れた家屋から9日ぶりに救出された老女とその孫のニュースは、奇跡の言葉とともに日本中を駆け巡って喜びに湧き上がり、私も同様の思いでテレビにくぎ付けになりました。

この状況を漢詩、広瀬武夫作「家兄に寄せて志を言う」の結句「弟と兄」になぞらえて「孫と婆」に置き換え、創作に挑戦しました。

第3期生「好文会」で漢詩を作り始め2年が経過、漢詩の大会に初めて応募したところ受賞し、喜びはひとしおです。この思いを糧に今後さらに精進して参りたいと思います。

諸橋徹次博士記念漢詩大会

[優秀賞　鈴木虎雄賞]

雪徑看梅　水荘　古田光子

一白郊村細徑通　一白の郊村　細徑通ず
朝来案句歩林東　朝来　句を案じて林東に歩す
鳴禽飛拂枝頭雪　鳴禽　飛んで払う枝頭の雪
忽看梅花數點紅　忽ち看る梅花　数点紅なるを

[奨励賞　朝日新聞新潟総局賞]

[特別賞　米峰賞]

八十九歳夏偶感　宇津井寛

師友戦中顛苦艱　師友　戦中　苦艱に顛る
吾人僥倖得生還　吾人僥倖にして生還するを得たり
雖些寄与復興業　些か復興の業に寄与せしといえども
密詫幽魂老古山　密に幽魂に詫びて故山に老ゆ

上越新幹線燕三条駅より送迎バスに揺られること四十分、会場の諸橋徹次記念館に到着。ここは戦前の農村がそのまま残っているような土地柄。記念館はそれにそぐわぬ頗る立派な建物と庭園である。

午後二時半より記念講演。終わって旅館嵐渓荘に移動。午後八時まで懇親会。同夜はここに宿泊。岡山県漢詩連盟の会長、副会長さんと同室で楽しい一夜を過ごす。

翌日は小雨。午前十時より記念館にて表彰式、選評。私の詩が幸運にも奨励賞及び特別賞を受賞。これは自作の短歌「戦いに生き残りしを密かなる負い目としつつ傘寿迎ふる」を下敷きにしたもの。

昼食後、流觴曲水の宴。柏梁体を提出して、午後二時送迎バスにて帰途につく。水城先生とご一緒できたのは心強く有難かった。

[奨励賞　読売新聞新潟支局賞]

廃　駅　中島龍一

僻村荒站菜畦中　僻村の荒站菜畦の中
鉄路遺蹤簇草叢　鉄路の遺蹤　草叢簇る
人去幾年春復到　人去って幾年　春　復た到る
櫻花爛漫為誰紅　桜花爛漫誰が為に紅なり

朝日カルチャーの「窪寺教室」で添削を受けました。起句はもと一村駅舎菜畦中でした、また承句の五字目は生の字でした。この詩は鉄路の二字を使ってみたいと試行錯誤したものです。初心者でも添削によって良い詩になったため、栄えある賞をいただき望外の喜びです。受賞は今後の創作の励みになります。

[奨励賞　新潟日報社賞]

銷夏偶成　永津憲明

曲浦舟行一夕歓　曲浦　舟行　一夕の歓
右連島嶼左丘巒　右に島嶼連なり左に丘巒
當舷月影波揺漾　舷に当る月影　波揺漾
忽躍銀鱗天草灘　忽ち躍る銀鱗　天草灘

一昨年秋に開催された全国吟剣詩舞道大会(於日本武道館)で、頼山陽の「天草灘に泊す」を吟ずる機会があり、感動を覚え、昨夏、天草を旅した体験をもとに、作詩したものです。モーターボートを駆って沖合いに二三十頭の海豚の群に遭遇し、頼山陽の“瞥見大魚躍波間”はこの光景と直感しました。結句“忽躍銀鱗天草灘”が出来たので、灘に対応して巒を韻字に使う事を決め、情景設定を夕景とし、月影を登場させ、周囲の風物に浦、舟、島、波を配したものです。

玉井幸久先生の漢詩教室で手ほどきを受け、三年前から窪寺啓先生の添削教室に入らせていただき、ご指導を得ています。

［奨励賞　ＮＨＫ新潟放送局賞］

惜別罹災故郷　　泰山　岡田泰男

主人棄住流他国　　主人住を棄て他国に流れ
玄鳥回家繕舊巣　　玄鳥家に回りて旧巣を繕う
縦滅郷村還福島　　縦い郷村を滅すとも福島に還り
終塗妖毒拓農郊　　終には妖毒に塗れても農郊を拓かん

東日本大震災に関わる詩は十余首の連作をして「其の七」を応募しました。

「鸛鵲樓に登る」の流水対を含む全対格をモデルにして、律詩の中央部を作れば、後日再利用で律詩を作る時に容易になると欲の深い方法を考えています。

先人の名作から典故を求める「集句格」だけは避けたいと思いつつ結果は「主人、燕、舊巣、帰」の詩語が見られるように「事に感ず」の二番煎じと言う安易な作りとなり反省を要します。

詩吟と作詩の二足の草鞋を履き、多読、多作、少推敲で粗製乱造でしたがこれからは「精作」に転じたいものです。

［秀作賞］

法隆寺再訪　　水城まゆみ

千古遺蹤松徑幽　　千古の遺蹤　松徑　幽なり
五層奇塔憶曾游　　五層の奇塔　曾游を憶う
當年黄口青絲客　　当年　黄口青糸の客
今日重來已白頭　　今日　重ねて来たれば　已に白頭

この詩は昨秋、姉妹で遷都一三〇〇年を迎えた奈良、法隆寺を再訪した時の感慨を詠じたものです。

初訪した時は中学の修学旅行で、今回尋ねた時も当時の私達と同じ年代の溌剌とした制服姿の少年少女に出会いました。当時のことは殆ど覚えていませんでしたが、今回再訪して門前の翠松の道と、風霜に耐えて蒼然とした五重の塔が印象に残りました。

岳精流日本吟院において「漢詩講座」スタートする

県連の会員でもある岳精流日本吟院の宗家、横山精真先生の肝入れにより、同吟院の川崎教場において県連の教師陣を派遣して漢詩講座がスタートした。

十一月を初回として明年三月まで五回の漢詩作詩を主体とした講座である。十一月十九日の初回は、岡崎会長の〝漢詩の周辺〟をテーマとした講話、そして詩を吟ずる人は自作自吟を目指して欲しいと、勉強の目標を示された。

県連としては今後、吟界、書道界と連携して漢詩興隆の方策・漢詩作りの仲間を増やしていきたい、とも話された。この初回の出席者は五十名余で、教室は溢れるほどの盛況であった。

二回目の十二月三日は事務局長　桜庭の漢詩作詩および漢和辞典の引き方等より始めて、七言絶句一首を完成させることを目標として、“たゆまずに着実に一歩ずつ踏みしめて欲しい”との言で終わった。今後も県連よりコーチ陣を交替で派遣する予定である。（桜庭記）

窪寺貫道先生をお迎えし 漢詩サークル交流会開催！

神奈川県漢詩サークル交流会が十二月二日、神奈川近代文学館で、窪寺貫道先生を講師にお迎えして、初めて開催された。

現在、連盟には五つの漢詩サークルがある。この五年間に初心者講座を受けた人達の有志が創ったサークルで、人数は何れも十名前後、一回／二ヶ月位の頻度で漢詩創作の勉強に励んでいる。

一期生「金星会」　二期生「三水会」
三期生「好文会」　四期生「詩游会」
五期生「五友会」

これまでこの五つの会のお互いの交流は無かったが、一度一堂に会して楽しく語り合おうという話が持ち上がり、この機会に窪寺先生に、漢詩上達の為の基本的なお話をお願いすることになった。

先生のご講演はその名もずばり

「漢詩作法上達のコツ」

と題しての講義をしていただいた。

まず〝作詩力低迷(下手)の原因〟について次の七項目を挙げられた。

一、素直さの欠落
二、理屈や説明の妄用、重複・無駄の無視、安易句の頻用
三、工夫の不足

四、辞書の不活用（造語、造句）
五、焦点の不明
六、起承転結の不備
七、推敲不足又は不備

どの項目も胸に手を当てて考えると思い当たる事ばかりで、日頃の作詩に際しての心構えの不足・不備を反省させられた。

次いで、〃上達の早道〃として次の七項目を挙げられた。

一、風景の詩を平易に作る
二、観察を細かく
三、婉曲・回環
四、語彙と知識を殖やし、用例を活用する
五、詩情の涵養
六、典故の利用
七、意象の活用

一つ一つの説明はここでは控えるが、これからの詩作に際して、是非共心がけていきたいという思いを強くした。

これに続き、“推敲の実例”を示され、何故こう直したかを微に入り、細に入り説明をされた。又、各種コンクールで最優秀賞を受けた漢詩を実例として挙げられ、どの点が優れているか等の説明があった。高校生や大学生の詩も含まれていて、素直に詠った詩が素晴らしいということをあらためて知ることが出来た。最後に行った質疑応答も活発で充実の二時間であった。

講義の後は、ポートヒルホテルに会場を変えて懇親会。各サークル代表者の挨拶、全日本漢詩大会、その他の漢詩大会での入賞者の嬉しい喜びの声に始まり、詩吟などの余興を楽しんだ。何時ものように窪寺先生がナプキンに出席の皆さんへの激励の詩を披露され、これを住田監事が朗朗と吟じ、拍手喝采を受けた。

朔風度海到丘頭　韃靼飛廉萬里周
縮首老翁扶杖處　金川詩客意悠悠

懇親会は岡崎新会長が得意の喉で締めくくられ、無事閉会となった。

（室橋　記）

鎌倉に『陶淵明』を聞く！

室橋　幸子

十一月二十日　鎌倉生涯学習センターに於いて、『中国の名詩を詩う会』の恒例の会が催された。会場はほぼ満席、一コーナー毎に大きな拍手、充実した二時間であった。

主宰の佐藤敏彦先生は、毎年この鎌倉の地で『漢詩』を皆に理解しやすく楽しんでもらおうと尽力なさっておられ、漢詩を解り易い日本語に訳して吟じられる点にこの会の特徴がある。

今年は、陶淵明の〔桃花源の記（桃源郷物語）を詩う〕であった。美しい映像をバックに会員の皆さんが独特の節調で朗詠。フルートとお箏の伴奏も加わって朗朗たる響きを秋の鎌倉に響かせていた。

第一部は〔桃花源の記〕、「桃花源の詩」を色彩豊な映像を加え桃源郷の由来等の面白い物語を解りやすく表現されていた。

第二部は〔帰去来の辞〕、有名な、いざ帰りなん、から始まる。これには日展作家吉田春水氏の書作品もバックの映像で披露された。そして、〔飲酒二首〕の後が、極めつけの〔雑詩〕、恐らくこの詩に、陶淵明は、自分の考えのあらゆることを表現し結論付けたかったのかと想像したりする。

フィナーレはこの〔雑詩〕を佐藤敏彦先生ほか十五名全員で、男女ともども当時を偲ばせる服装の勢揃いで朗詠。心憎い幕切れであった。

来年一度ご覧になることをお勧めしたい。

シリーズ漢詩の話

『漢詩と私』

副会長　田原健一

漢詩に興味を持ったきっかけは、中国に独りで遊びに行った折の出会いに始まる。

江南の名所を回る途中、扁額の中に[青眼]とあった。「与君青眼客、共有白雲心」よく判らないまま、青い目をした西域の美女と解釈した。帰国後、辞書を引いて好意的な目つきと解った。[白眼]の反対語であった。客とは作者のことであった。へーと思った。

言い出した晋の国の阮籍の詩を読んでみた。その中にウムと唸らされた詩に出会った。

終身履薄氷　終身薄氷をふむ
誰知我心焦　誰か我心の焦るを知らん

当時、小生の稼業はまさしく明日が読めない状況で、いつ破綻の道に入るか不安の日々であった。ズバッと胸倉を掴まえられたような気がした。こんな詩が作れたら素晴らしいだろうなと思った。

あれから十五年、今や漢詩は老後の生活の主軸となっている。

窪寺先生に詩を敲かれること十二年、いまだに闇夜にカンテラをかざして行方定め得ぬ彷徨の人である。上手くならない訳は承知している。生来の雑駁さと粘りの無さである。想いはあっても伝える技量の深さが無い。

嫌になりかけた頃、漢詩連盟の立ち上げを手伝えと今は亡き中山老体から要請があった。窪寺教室の中では比較的若いということが指名の理由であった。

事務局の仕事は、詩を作るより数倍楽であった。俗界の性癖は抜けず、作詩は後回しにしている自分がいた。お陰様で会員の数は倍増した。忙しさを理由にして、上手くならない自分、基礎的な勉強をさぼっている自分を許した。沢山の人と知り合った。充実した気分であった。

そろそろバトンタッチの時期と考えた。虫が知らせたと言うべきか故中山会長も同じ意見であった。用意周到に半年がかりで連盟の仕事を若い人達に繋いだ。生き生きと動いて貰っている。今後が楽しみである。

[写実]とは、風物をより忠実に活写することである。自分の感興など後回し、徹底して観照する、そうすれば自ずと気持ちは付いてくる、気持ちは抑えて風景に徹しなさいと言われる。

[写意]という言葉がある。意を尽くすという意味であるが、風物の外観よりもその物の精神真髄を写そうとするやり方で、文字遣いに、筆遣いに気持ちを載せるやり方である。

写実といい、写意といい、どちらもどこかで繋がっていて、[写生]という点ではおなじ所に行き着くようである。文字通り、生を写すのが詩である。

[寄物陳思]、登る道は沢山あってよい。

やっと勉強時間の余裕を得たと思っているが、一方でのんびりサボって過ごしたい自分がいることも事実。どうなることやら。

終

囲碁と漢詩

板本健作（投稿）

私は定年退職して、今は福祉囲碁協会のボランテア棋士として月に四回ほど身体障害者養護施設、デイケアセンター、診療所の囲碁サークルに通っています。

視覚障害者の方と打ったり囲碁を通じて様々な方との出会いがあります。その福祉囲碁協会で「ふれあい福祉囲碁」というイベントが行われる事になりました。

さわやかな秋晴れとなった十月十六日、藤沢市江ノ島の「県立かながわ女性センター」で、視覚障害者用の碁盤の体験対局、名誉アマ本因坊の原田実氏の指導対局、木谷正道氏のやさしい囲碁入門講座と、心の唄ギター弾き語りなど、老若男女多様な参加者が、秋の一日囲碁を楽しみました。私は囲碁も弱く漢詩も学び始めたばかりの初心者ですがこの光景を漢詩に詠んでみました。

囲碁も漢詩も千年以上前に中国から日本に伝えられ、こんなに関係が深いとは思いませんでした。このところ漢詩入門書や詩書を読み、囲碁の定石や手筋の本を読み、囲碁と漢詩の奥深い世界の入り口付近を楽しく彷徨っています。

絵島福祉囲碁交流会

風清波穏舞閑鴎　風清く波穏やかに閑鴎舞い
棋客連跟會海樓　棋客　跟を連ね海樓に会す
老少欣欣開黒白　老少　欣々　黒白を開き
忘時闘智手談囚　時を忘れ智を闘わす手談の囚

『自然を詠う詩　山の詩』

（平成二十三年度総会講演、続き）

石川忠久先生

さて、次に「始寧の墅に過ぎる」と云う謝霊運の詩を読みましょう。

この人は一流中の一流の貴族です。藤原道長のような家の出であります。先の陶淵明が三流の木っ端貴族だったのとは全然違う。この人は一流貴族の一流詩人でしたから、皆が振り仰いでいた。謝霊運様のような人が、三流貴族の陶淵明なぞは眼中にない。そう云うわけで、この二人の影響関係を考えている人は居ない。私は、そうではないと考えています。霊運は２０才年下。謝霊運の影響は陶淵明にはないが、陶淵明の影響は謝霊運にはある。これは極く自然の話でしょう。しかもお互いに、三流と一流とは云え、貴族社会の人間ですから。

先の「飲酒其の五」とこれからご紹介する「始寧の墅に過ぎる」には直接の関係はありません。

過始寧墅　始寧の墅に過ぎる　謝霊運

束髪懐耿介　束髪より耿介を懐きしも
逐物遂推遷　物を逐うて遂に推し遷る
違志似如昨　志に違うこと昨の如きに似たるも
二紀及茲年　二紀にして茲の年に及べり
緇磷謝清曠　緇ずみ磷りて清曠に謝し
疲薾慙貞堅　疲れ薾れて貞堅に慙ず
拙疾相倚薄　拙きと疾いと相倚り薄りて
還得静者便　還って静者の便を得たり
剖竹守滄海　竹を剖いて滄海に守たり
枉帆過旧山　帆を枉げて旧山に過れり
山行窮登頓　山を行きては　登り頓りを窮め
水涉尽洄沿　水を涉っては洄り沿りを尽くす
巖峭嶺稠畳　巖峭しくして　嶺稠畳し
州縈渚連綿　州縈りて　渚連綿たり
白雲抱幽石　白雲　幽石を抱き
緑篠媚清漣　緑篠　清漣に媚ぶ
葺宇臨迴江　宇を葺いて迴江に臨み
築観基曾巓　観を築いて曾巓に基す
揮手告郷曲　手を揮って郷曲に告ぐ
三戴期帰施　「三戴にして帰施せんと期す
且為樹枌檟　且く為めに枌と檟を樹え
無令孤願言　願言に孤かしむる無れ」と

四句目で一寸切れ、次の四句プラス二句で切れる。十句目が「山」で終り、十一句目の始めの「山」は、先の陶淵明と似てますネ。次の八句は一気につながり、大きく切れる。そして終り四句。ここまで読んでどう思いますか？非常に技巧的です。陶淵明の詩は易しい。こちらはむつかしい。わざとむつかしく詠っているのです。何故かと云うと自分はトップに居る。世間の一番トップに居る。だから「どうだ、諸君に出来るか」とひけらかしているのです。詩語も昔の言葉を使って、これでもか、と詠っている。これで嫌われた。これで嫌われたから、後世は段々謝霊運の詩を読まなくなってしまったのです。時代の先端を切っていると云う自覚が非常に強いのでもうありったけの知識と言葉でもって、追い付くのは大変なのです。

処が陶淵明の方は三流貴族なものだから、気楽で観客にそれが伝わる。面白いものですネ。トップに居る人は大変なのです。トップに居てもトップのわざは１０年たち、２０年たつと、真似されてしまう。処がそれを狙わない方は、そう云う良い意味がすーっと伝わるのですネ。

陶淵明と謝霊運は同じ時代に生きていて典型的に違っています。面白いですネ。生きている位置が違ったから、自ら違って来る。

では詩に戻ります。始寧と云うのは土地の名前。謝と云う貴族は元々は北の貴族です。それが、北が異民族に支配されることによって、皆その地を離れて逃げた。南へ根拠地を移す。現在の浙江省。ここに大きな土地を持つ。彼はこの時、更に南の方に左遷された。杭州・南京・上海に近い辺りが根拠地。そこから更にずーっと南に左遷された。何故左遷されたかと云うと、気の毒なことに彼は革命に出会ってしまった。晋と云う王朝が亡びて宋と云う王朝になった時に、貴族の格を下げられた。公爵である事は同じだったが、領地を減らされた。そして自分より家柄の下の者が上になってしまった。我慢出来ない。不平を云う人に限って我慢出来ない。そこで我慢出来ない事を外に出した。先ず勤務を怠ける。無断で遊ぶ。そう云うことをしているうちに、彼は怪しいぞ、と云うことになってしまった。王朝に不満があるとされ、とうとう最後はムホン罪と云うことで処刑されてしまう。４９才の時でした。これはまだ処刑される前ですが、遠くへ左遷された。この時に気がついてい

れば良かったのに気がつかなかった。

私はあげ巻きの頃より世間付合いをしないで生きて来た。耿介と云うのは世間付合いしないこと。それがそのまま推し移って、とうとう今日になった。易しく云うと、子供の時から自然に親しむと云う性質を持っていたのだけれど、つい推し流されて今になってしまった。志に違うことは昨日のように思われるけれど、二紀も立ってしまった。一紀は12年ですから24年ですが、実際には17・18年です。少しオーバーに云っている。自分はもう田舎に引込んでいたいと思い乍らそれが出来ず、ついついこの年になった。

くろずんだり、すりへったりして、清らかでひろびろとした暮らしに対して耻かしい。謝し、は耻かしい。自分のことを緇んだり磷ったりと、世の中でもみくちゃになって、糸で云えば緇み、石で云えば磷った石になってしまった。清らかでひろびろしている清曠の生き方をしている人に耻かしい。疲れ薾れて、みさを正しく堅く生きている人に対しても耻かしい。いかにも自分が汚れたつまらない生き方をしてしまったことを反省しているように見えるが、実は一つも反省していない。云っていることと本音は関係ありません。彼の人生のことを本当に詠っているのではない。

世渡り下手と病気とが、より迫って、還って静かな生き方の便を得た。ずい分むつかしいことを云っているが分かり易く云うと、自分は世渡り下手で、而も病気。実際は病気などしていませんが、病気と云うのは言葉のアヤ。静者の便と云うのは、遠くへ飛ばされて、そこで知事をすることです。永嘉と云う処の太守になった。今の雲州です。ここの長官に飛ばされたわけです。今迄朝廷でもって時めいていた人間が、こんな田舎の方の長官に飛ばされるわけで、却って良かったと負け惜しみを云っている。世渡り下手と病気が相い迫って却って静かな便を得た。竹を剖く、というのは辞令を貰うこと。昔は竹を二つに割って、片方は任地にあり、片方は朝廷にある。出向く前に朝廷にあるのを受取って任地に赴く。任地で持参のものとぴたっと合えばよし。昔は写真があったわけではないから、こうした。そして離任する時には半分を持って朝廷に返す。

永嘉郡の太守の辞令を貰って、海沿いの地方の長官になった。そのついでに一寸帆を枉げて、ふるさとの山に立ちよることにした。都から永嘉にいくのにはどうしても旧山を通る。そこで一寸立寄った。ここで一寸、と大きく切れます。だが「山」と云う字でつながっているから、本当は切れないのだと云っている。「山」と云う字で次とくつけているのは、陶淵明にならった可能性が非常に強い。山歩きに登り下りを窮め、水を渉って行くのに洄り沿りをつくす。この人は山水の自然が大好きな人ですから、あちこち遊びまわっている。それでもって一寸っと素行が怪しいと疑われたわけですが、何しろ家に三千人の食客が居たという。それを引き連れて歩く。それで全く道の無い処にパーっと道を作ってしまう。そして山のてっぺんに屋形をこしらえてしまう。勢い余って、山の向側迄行ってしまう。山の向こうの知事がびっくりして山賊が来たと思って大騒ぎになったこともある。そんな事も、彼が疑われる原因になった。金はいくらでもあるから、ワーッと道路を作ったり屋形を作ったり。水の洄り沿りは、上流に行ったり、下流に行ったりすることです。ここで、山と水が出て来ました。山をA、水をBとする。そうすると山行はA水渉はB、次の巌峭の句は山の景色でA、州縈の句は水の景色でB、白雲は山の景色、緑篠清漣に媚ぶは水の景色。白い雲が山の岩を「抱く」、緑の篠竹がピシャピシャと漣に「媚びる」ようにしている。媚びるとか抱くとかは人間の動作ですネ。擬人法です。人間ではない物を人間のように詠っている。これが新鮮だった。もちろんこれ以前にも擬人法はあるが、この二句は非常に高く評価されて、禅の方の謁にもなっています。白雲・緑篠の句は何気ない表現のようではあるが、この人の詩のセンスを示している。詩のセンスが非常に高い。自然を見つめる目と云うか、ムクムクと白い雲が湧き、岩を抱くようにしている。緑の篠竹がチャプチャプと水にたれて媚びている。次の宇を葺くの句は水辺に屋形を建てるので水。曾巓は山。そうすると1行目から、山・水、山・水　山・水と来て、水・山となっている。ABABABで最後がBAと交錯する。ここもABだったらまだ続くことになるのです。〆めるために最後をBAとして決める。これを交錯句法と云います。この方法は応用範囲が広い。短い詩でも、ABABとやるよりは，ABBAと並べた方が落ち着きが良い。これは参考になると思います。景色を詠むのに右を

見て左を見て、又右を見て左ではキョロキョロしすぎて具合が悪いが、右・左・左・右と交錯させると、ピシャリと納まります。

この辺りに謝霊運の真骨頂が表れています。山水詩人と云われるようになったのも、この工夫にあります。山と水をぐーっと推して、水山でぴしゃりと締める。最後に、故郷の皆さんに告げましょう。私はこれから任務を負って任地へ出かけて行くが、三年たったら帰って来る。一般に地方長官の任期は三年ですから。どうぞ私の為に枌と櫝を植えて下さい。この枌と櫝は棺桶の材料です・棺桶の材料となる枌と櫝を植えて、どうぞ私の願いにそむくことの無いようにして下さい。何が云いたいかと云うと「自分は三年経ったら帰ってきて、ずーっと死ぬまでここに居るよ、だから予め棺桶用の材料を育てておいて下さい」と。その通りにやれば良かったのに、やらなかった。だから彼はとうとう最後は処刑されてしまう。無ざんなことに、今の広東で処刑され、人が一番集まる処でさらして見せしめにされる。死骸を切ってばらしてさらすのです。むごい話ですネ。一流の貴族に生まれたが、最後は棄市された。こう云うことで、この人物は後世、棄市されたと云う事は事実としてあるので、これが彼の評価にも影響した。陶淵明と全然違う。陶淵明の方は清らかで質素な一生を送った。謝霊運はこのような無残な死に方をした。そのようなことはどちらも芸術としての詩には関係はないのだが、関係づけて評されるようになってしまいました。

さて、この二人は共に自然を詠いましたが、陶淵明の方は田園詩人と云われました。田園を見つめて田園を詠っている詩が多い。これも彼自身が田園に出て働いていると考える必要はない。大きな荘園の持ち主でしたから、働いているのは小作人です。彼の詩の中には、鋤を持ってたがやす、終って帰る頃に月が出たと云う句があるが、そうすると、今の人は彼自らが鋤を持って日暮れ迄働いた。ああ正に田園詩人だなァと思う。思うことは勝手だが事実は違う。詩人は本当のことのみを詠うのではない。環境を詠う。彼らは貴族社会に於いてこういう世界があるのだ。田園にはこう云う世界があるぞ、諸君は知らないだろうと一所懸命に伝えようとした。これが後世評価されたのです。この影響を一番受けたのが王維です。王維は8世紀の人です。生まれは699年なので7世紀の最後にかかっているが、8世紀の人です。ついでに各人の生没年をみておきましょう。生没年は陶淵明は365年生まれ、数え63才迄生きまして、427年に亡くなりました。謝霊運の方は20才若く385年生まれ、49才で処刑されましたから433年に亡くなった。王維は699年生まれ。時代はずーっと下がります。（文責　住田笛雄）

都漢連・神漢連
交流会初めて行わる

一月二十五日　横浜元町中華街において、両連盟の初めての交流会が行われた。参加者は両連盟とも十七名ずつで、媽祖廟を参拝のあと懇親会場に移り、神漢連岡崎会長の挨拶に続いて都漢連の窪寺会長が故中山清会長の思い出を語られ、石川忠久先生が交流会のために漢詩二首を披露された。

節入寒中歳此新　六街融雪共慶春
江都金港會詩友　只恨芳筵少一人

結句は中山清氏のことであり一同、深く感じ入った。即座に窪寺会長が次韻され中山清氏を詠い込んだためあらためて感心した。

敬歩岳堂先生原玉
東風尚冷節還新　雪霽華街欲樂春
雅友東西連踵到　唯悲獨缺入泉人
（「新」「春」「人」が次韻）

石川先生のもう一首は

開春三日雪晴晨　媽祖廟前詩酒親
須楽而無憂不足　華街深處有汪倫

結句の汪倫は李白の「贈汪倫」にちなんでおり、李白が桃花潭に遊ぶとき、村人汪倫が常に美酒を造って待っていたとの故事であるが、これも先生の思い出が込められている。つまり懇親会場の彩香新館の社長の曹徳深さんは、横浜翠嵐高校の生徒のとき漢文の先生が石川先生だったというのだ。石川先生が東大の大学院を出たてで新婚ほやほや、共に紅顔の美少年（？）であったという。その後、曹さんは華僑総会の会長（現顧問）となって中華街に媽祖廟を建設した際、先生に漢詩を依頼されて正門の右側に四言の詩を掲げられた、という因縁を持つ。曹さ

んを汪倫にたとえたのである。曹さんも途中から同席され、当時の先生の教室での思い出話しも語っていただいた。

この後、神奈川側が詩吟を次々に4名が詠い、都側が7名の女性出席者の中の1人がオペラのツーランドットの一節をソプラノで歌うと、直ぐに続いて岡崎会長が出身地鳥取の貝殻節で男性的なしぶい喉を鳴らされるという場面が対照的であった。最後は伯梁体の講評を石川先生が面白おかしく話されて一同爆笑の連続であった。

（中島　記）

県連のホームページ立上に向けて

執行理事　三上光敏

現在、執行理事・運営委員を中心にしてホームページ（以降、HP）立上に向けて、その第一歩としてプロトタイプ（注参照）HPを作成してこれに絡む諸課題をうきぼりにすることになりましたので、中間報告をします。

本企画が話題になりましたのは一年以上前になります。課題は費用対効果。どうもはっきりしません。巷に散見されるネット上の失敗例が本件への慎重な取り組みになりました。

そこで先行してHPを作成している全日本漢詩連盟や東京都漢詩連盟などからその知見をいただくことと、出来れば予想される費用を軽減する手段の模索をすることから始めました。結論的には例えば全日本漢詩連盟HPのスペースの一部を利用させて頂くことは出来ないこと、HP作成を専門業者に委ねると多大な費用が発生すること、更に運営にあたってネットを見る方が満足する適切な情報更新が必須であることが分かりました。

HPの運営によって、タイムリーに会員の方々へ情報提供するとともに一般の方（不特定の方々）へ県連の活動を正しく理解していただき、漢詩への一層の興味を誘させて会員増強に繋がることを期待したいと思います。内容は連盟の年次計画・実行計画、行事の実績報告、運営組織（会長の顔写真は必須?）・事務局・連絡先、入退会案内、他の漢詩連盟とのリンクそして漢詩鑑賞講座ややさしい漢詩実作講座などについての記事や写真（必要なら動画も）です。

さて、今後はプロトタイプHP作成を進めて、課題を明瞭にすると共に役員をはじめ会員の方々が納得するような解決策を模索していきたいと考えています。出来れば連盟の会員のなかでHPの作成やその後のフォローアップにご協力いただける方がおいでになれば連盟にとって大変助かります。皆さまの一層のご理解・ご協力を心から期待しております。

（注）プロトタイプ

プロトタイプ（英: prototype）は、デモンストレーション目的や新技術・新機構の検証、量産前での問題点の洗い出しのために設計・仮組み・製造された試験機・試作回路・コンピュータプログラムのことを指す。

「神奈川清韻」についてのお知らせ

神奈川県漢詩連盟の創立五周年を記念して、既に昨年四月に八十八名の作品を漢詩集「神奈川清韻」として刊行しましたが、この度、国立国会図書館に登録され「日本全国書誌」に書誌情報として掲載されます。

検索をしたい場合は下記を利用下さい。

http://opac.ndl.go.jp/index.html

なお、「神奈川清韻」は残部数があります。希望者は事務局へお申し込み下さい（五百円）。

ファックス　045-895-2662　桜庭宛へ

二十四年度前半のスケジュール

カレンダーに予定を記入しましょう

● 第7回年次総会　例年通り記念講演と懇親会をかねて実施します
- 時期　5月22日(火)　午後1時～3時半
- 場所　神奈川近代文学館　2階ホール
- 記念講演　石川忠久先生　演題『杜甫の詩を味わう』
- 懇親会　ホテルポートヒル　3階ホール　午後4時～6時　会費5千円

後日あらためて、出欠確認の手紙を差し上げます

● 春の研修会　従来と同じ「選句方式」で2～3グループに分けて実施します
- 時期　Aグループ　6月12日(火)　午後1時～5時
  Bグループ　6月26日(火)　午後1時～5時
- 場所　神奈川近代文学館　2階会議室
- 申込　後日あらためて、出欠確認の手紙を差し上げます
  その時に、ご都合よい日を選んで申し込んでください
- 詩稿提出先　〒259-1304　秦野市堀山下 600-9　水城まゆみ宛

● 初心者入門講座　第6回の講座を例年通り実施します
- 時期　漢詩に関心あるお友達に声を掛け、推薦してください
  4月5日(木)、4月19日(木)、5月10日(木)、
  5月24日(木)、6月7日(木)、6月21日(木)
  の計6回の授業　毎回午後1時～4時
- 場所　神奈川近代文学館　2階会議室
- 講師　岡崎満義会長ならびに連盟役員

申込は(連盟事務局)　〒247-0006　横浜市栄区笠間 5-3-2-103　桜庭慎吾　宛
電話&FAX　045-895-2662

● 吟行会　今年秋に予定しています　確定次第あらためてご連絡します

▼ 編集後記

★新体制下での編集作業2回目を迎えた。前回の経験もあり、編集作業には比較的スムースに入ることができたが、なかなか意図通りにはいかず、何かと苦労した。

一、連盟の活発な活動を象徴するように、掲載候補の記事が多く、その取捨選択と簡潔な記事の作成を心がけたが、それでもページ数は今までより増加した。

二、「漢詩を始めた動機」「私の好きな漢詩」という二つの観点からのシリーズ記事『漢詩の話』欄を今回から新たに設定し、第一回を田原副会長にお願いした。このシリーズ記事は今後、別途計画中のホームページと連動させていきたい。

三、会員の自由投稿は紙面の関係もあるので、このテーマに沿ったものにしていただきたい。又、記事中の自作漢詩は基本的な過ちがないよう十分な推敲をお願いします。場合によっては事務局で対処させていただくこともあります。

★大本久会員からお手持ちの漢詩関連蔵書約200冊余を神漢連に寄贈したいというお申し出があった。ご趣旨を生かして、これを会員の皆様方に活用していただくべく、その方法等について現在計画中です。決まり次第、あらためて皆様にご連絡いたします。

★題字の背景が暗くて字が読みにくいというご指摘がありましたので、修正しました。

（三村／中島／吉岡　記）